

冬樟展

令和三年度
第百二十八回京都大学書道部書展

巻頭に寄せて

京都大学書道部　部長　戸髙海

少し自分の高校時代の話を書きたいと思います。高校生の時、それまで習字しかやってこなかった自分は初めて整っていない文字に出会いました。当時臨書に取り組んでいた王鐸という書家の作品です。その時は良さが分からず、もやもやしながら書いていたことを覚えています。せっかく書くのだから良さを分かりたい。それがきっかけで王鐸について調べ、とにかくたくさんの作品に触れるようにしました。そうすると、たしかに王鐸が書いて表現しようしたものが受け取れるようになりました。（と感じているだけかもしれませんが。）それは、自分の書に対する感覚が転換した体験であり、分からないからと切り捨てずに向き合えばきちんと受け取ることができるという、自分の書道に対する向き合い方の基礎にもなりました。同時にそれがきっかけで、書道の作品、もっと言えば作品に限らず手書き文字を漁ることが私の習性のようになりました。私の出身は宮崎県で大きな書道の展覧会や、古典が展示されるような機会はほとんど有りません。高校生のときは、図書館や部室の本、そしてインターネットにある書を見続けました。これらの環境が整備されている今の時代だからこそ、本当にいろいろな書に触れることができたと思います。もちろんその中にはホームページに公開されている京都大学書道部の書展パンフレットも含まれています。パンフレットで見た作品はどれもとても魅力的でした。現在の書道に取り組む環境を見ると、教室や会、書風ごとにまとまって、それぞれ独立した規範の中で書道を追求している、という場所が多いように感じています。その中で、大学の書道部は他では少ない貴重な環境のように思います。書道的な背景が全く違う人達が、同じ場所に集まって、別々の方向を目指しながら書道をしています。そのような環境で作られた作品は、自分の書きたいものを追求して、書道を純粋に楽しんでいることが伝わってきて、とても新鮮な作品ばかりでした。大学書道部の書展は自由でバラバラだからこそ、他には無い良さがあると思います。そうして高校の時に感動しながら眺めていたこの書展パンフレットに、自分の作品が載って、こうして巻頭言を書いているのはとても感慨深いです。

そのようにして本やインターネットで書に触れていた私ですが、高校二年生の時に東京国立博物館で開催された顔真卿の特別展を見に行きます。そこで当時臨書していた黄庭堅の法帖や王鐸の書の実物を見ることができました。使っていた法帖は鮮明に印刷されていたはずなのですが、いざ本物を目の前にすると言葉では言い表せない感動がありました。本物は思っていたよりもずっと緻密で丁寧で、気迫に満ちていました。とてもありきたりな話ですが、本やインターネットで沢山の書に触れられるようになった今でも、やはり本物に対峙しないとわからないことがたくさんあると感じました。だからこそ、今回限定的ではありますが、ようやく対面で書展ができたことをとても嬉しく思います。

昨年はコロナウイルスが広がり、私が入学してからの初夏書展・冬樟展は中止またはオンライン開催になりました。他の書道展もオンラインの対応を迫られ、インターネットに漂っている書道作品も、この一年でとても増えたように感じます。田舎にいる高校生の私は喜んでそれらを漁っていたでしょう。この文章を書きながら、先輩方をはじめ、コロナ禍で作品を作り発信し続けてくれた方々に本当に感謝したいと思いました。

最後に、こうして書展を無事開催できるのは顧問の成田健太郎先生と行友三輪子様、技術顧問の寺本蒼玄先生をはじめとする多くの方々のおかげです。この場を借りて心より御礼申し上げます。

そして、書展にお越し頂いた皆様、本日は誠にありがとうございます。ぜひ、大学書道部ならではの書展を楽しんで、お気に入りの作品を見つけていただければと思います。

令和三年十二月吉日

巻物を巻く話

行友　三輪子（書道部OB・京都大学附属図書館図書館企画掛主任）

書作品を軸装にすると、収納時にきれいに巻けない時がありますね。今回はそんな「巻物」の話です。

私は、貴重書を撮影してwebで公開する仕事をしています。第一工程として、資料のサイズやページ数を確認します。

ここ半年間は、巻物のサイズを計測していました。その数三百本。横に長い巻物の場合、縦（軸）の長さを計るのは簡単ですが、横を計るには本紙を全て広げるしかありません。広げた後は元通り巻き直しますが、広げるより巻き直す方が余程大変です。

何が大変かというと、思い通りまっすぐ巻けず、紙の端が円錐状に出っ張ってしまうのです（私たちは「タケノコ」と呼んでいました）。こうなると端が傷みますし、箱に入らなくなる場合もあります。軸なしで直径五センチの巻物であれば、横の長さは十メートルにも及び、巻き戻した時には立派なタケノコが出来上がります。

巻物を巻くコツを調べましたが、せいぜい紐の結び方が紹介されている程度。仕方がないので自分なりに色々試し、一番美しく巻けた方法がこちらです。

・巻物を縦方向に置き、手前から向こう側へ巻く。
・少し巻いては、巻物を持ち上げて手前に引き寄せる、を繰り返す。（この時巻物を机にこすらないよう注意）
・巻く時は、軸の中央部分に両手を添える。（軸の両端を持って巻くのが王道なのですが、利き手側の巻きが強くなるため、斜めになりがちです）
・「ずれたかな？」と思うところ（ずれ幅約一ミリ）で軌道修正する。（「ずれた」と確信してから軌道修正しても手遅れに）
・きつく巻き過ぎず、ゆとりをもって巻く。（資料保護と、後から微調整できるため）

長大な巻物を美しく巻けるようになり、行友プロ！と同僚にもてはやされました。が、三か月ぶりに巻物を巻いてみると、またタケノコが……。書道と同じで、何事も継続が大事です。

最初の頃

寺本蒼玄（京都大学書道部技術顧問）

私が書道の師匠（古谷蒼韻先生）についたのは、大学一回生の初夏の頃でした。書道の基本から学ぶつもりでしたが、早く上手になるためには、先ず、書道の公募展に出品をたくさんしなさいということで、とにかく枚数を書きなさいと教えられました。

基本の古典とは別に、展覧会の作品向けの古典を学びながら、造形法や、運筆、墨の濃淡などの技術や理論を学ばせていただきました。

最初学んだ古典は、明代の黄道周で、その当時条幅の作品が二、三点あったくらいで、作品の集字をするのが大変でした。寺町の文苑堂という、書道専門の本屋に行き、古書蹟の中から、数点見つけて大喜びしたものです。早速集字をして作品形態に貼りつけて、それを見ながら、作品を書いたと記憶しています。

最初の公募展は、第三回現創会書展で、ただ我武者羅に四十字の詩を黄道周風に書いていたと思います。しかも用紙は三尺×八尺の額に入る紙で、現在は作品用に創られた用紙がありますが、当時全紙版しか無く、用紙を貼り接いで作って書いていました。又、墨液も無く、九吋の羅紋硯で二、三時間かけて、磨墨していたと思います。

現在は、その様な準備はしなくていいわけですから、たくさんすぐに書いていけるので、練習を数百枚も書けば良い作品になると思います。好きな古典を見つけて、その特徴や味わいが出ている文字を山場にくるように詩文を見つければ良い訳で、選文に五割、製作に三割の配分で良いと思います。頑張ってください。

作品制作の方法―臨書と創作―

書作品を作る方法には、臨書と創作の二つがあります。

臨書

歴史上の優れた書の古典を手本として、それを真似て書くことを臨書と言います。書道の学習で最も基本となる方法で、伝統的には次の三つの段階を踏むのが良いとされます。

(1) **形臨**　文字の形や筆遣いを似せて書くことです。古典をよく観察し、できるだけ古典に近づけて書くことが学習の出発点となります。

(2) **意臨**　形に拘らず、古典の雰囲気や精神を汲み取って書くことです。意臨が重視されるのは、形だけを追っていると時に筆運びのリズムが失われ、浅い印象の書になってしまうことがあるからです。また、古典の中には模本（敷き写し）や拓本（石に刻し、それを墨で写しとったもの）だけが残り、元の姿が伝わっていないものもあります。そのようなものを臨書する際には、想像力を働かせて書くことが必要です。

(3) **背臨**　古典を見ずに、記憶を頼りに再現して書くことです。古典をいかに観察し、理解しているかが問われます。

形臨、意臨、背臨と進むにつれて、臨書には書き手の個性が強く現れるようになります。臨書は単なる模倣ではなく、一つの表現方法なのです。臨書作品は、そのような学習の成果を作品として形にし、発表するものです。

臨書の対象となる古典が載る冊子を法帖と言います。初めから芸術作品として制作されたものもあれば、石碑や手紙、文章の下書きなど、実用的な目的で描かれたものもあります。

京大書道部の書展では、臨書作品の場合キャプションに臨書した法帖を掲示しています。ぜひ作品と見比べてご覧ください。

創作

臨書に対して、自分が表現したい言葉を書くことを創作と言います。自分で考えた言葉を書くこともあれば、漢詩や漢文、和歌や俳句、詩や短歌、歌詞などに題材を求めることもあります。

作品の構成や書体、書風は、選んだ言葉を最もよく表現できるように考えて工夫します。臨書の学習を活かし、古典の表現方法を取り入れると、作品に深みと味わいを出すことができます。

闇雲に言葉を書くのではなく、自ら感動や想いを言葉に託し、それに合った表現を探して書くのが創作作品です。

作品の構成―印と落款―

書作品の紙面は本文のほか、いくつかの要素からなっています。

落款

作品の末尾に書く署名とそれに続けて押す印を落款・落款印と言います。名前のほか、語句の出典や臨書した古典の名、製作した場所や時間を書くこともあります。

印の種類

落款印以外にも、作品の右上（冒頭部分）に押す引首印や、自由な位置におす遊印が加えられることがあります。

書体について

漢字には楷・行・草・隷・篆・仮名の六つの書体があります。数千年前に、身の回りの事物を書き記さんとする行為によって象形的な篆書が生まれ、文字としての美しさや抽象性、実用性を求める中で隷書が発展しました。現代でもよく使われている楷書・行書・草書はこの篆書と隷書を基盤として作られた書体です。また、日本が中国から漢字を輸入し独自に発展させた書体として仮名があります。

一口に〇書と言っても、書く者の呼吸や心の動き、如何なる結体を良しとするかという考え方や経験などによって、その書が持つ趣は変化します。そこに書の面白さや芸術性が在るのではないでしょうか。ぜひ色々な作品を見比べて、その面白さを体験してみましょう。



「楷書」は永字八法と呼ばれる、点・画・転折・払いに関する一定の規則によって書かれる書体です。その書法は唐代に完成され、堂々たる威厳と流麗な美しさを併せ持つ素晴らしい古典が多く残されています。

画像：森田歩

「行書」は楷書の速書き体として生まれ、楷書体を元にして点画を繋げたり省略したりして書かれる書体です。崩し方はさまざまで、曲線を軸とした流線的な書風もあれば、直線を軸とした豪快な書風もあります。

画像：石田あかり



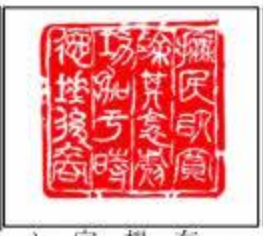
「草書」は隷書の速書き体として漢代に起った書体です。唐代までに一定の崩し方が確立された後、宋から明・清にかけて、その自由度の高さに表現性を見出した能書家らによって芸術性が高められました。

画像：戸高海



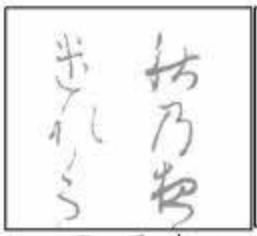
「隷書」は篆書から発展し、五体の中で唯一波磔と呼ばれる払いに似た横画を持つ書体です。文字として整えられつつも篆書の象形的な字形が残っており、筆法もまだ習熟していない段階であるため、美しさと古雅の魅力を併せ持つのが特徴と言えます。

画像：坂崎弘実



「篆書」はその絵的な造形に特徴がある最古の書体です。世界に存在する事物と文字とを初めて繋げた記号であり、その字形から想起されるイメージによって、豊かな表現性を持っています。漢字を知らない人にも魅力が伝わる作品がいくつも書かれています。

画像：平野晶子



「仮名」は日本語の音を割り当てた漢字の一部を変化させて作られた、日本固有の書体です。柔らかく流れのある運筆が特徴的で、全体に寛雅な雰囲気を持っています。散らし書きという独自の構成法も漢字書には無い魅力の一つです。

画像：渡辺紗英



「調和体」あるいは**「近代詩文書」**は戦後に一般的な可読性を重視する動きによって起った書体です。文学作品や詩・短歌・俳句、歌詞やセリフといった題材を用いるので、文意を加味した文学性のある作品を作ることができます。

画像：乗杉玲壽

書家・古典紹介

書展をより一層楽しむために、各書体の有名な書家や古典を一つずつ紹介します。

欧陽詢（五五七～六四一・唐）

褚遂良・虞世南と合わせて初唐の三大家と呼ばれている人物です。欧陽詢のもとで楷書は完成されたと言われており、左上の古典**「九成宮醴泉銘」**は楷書の極則と称されています。

王羲之（三百三？～三六一？・東晋）

楷・行・草の各体を芸術の域にまで高めたとされ、書聖と呼ばれる人物です。しかし、彼が書いた真蹟は今のところ一つも残っておらず、写しの法帖でしかその書を学ぶことができません。左真ん中の古典**「蘭亭序」**は行書の一つの規範とされています。

黄庭堅（千四十五～千百五・宋）

北宋の蘇軾や陸游と並び称される詩人であり、書家としては宋の四大家に数えられる秀でた文人です。左下の古典**「李太白憶旧遊詩巻」**は彼を代表するものであり、奔放な崩しと紙面全体に働きかけるスケールの大きな運筆が魅力の古典です。



筆者不明（一八五・後漢）

左上の古典**「曹全碑」**は隷書全盛の時代に書かれた最も有名と言っても良い隷書古典です。流麗な運筆で字中の余白をしっかり取って書かれており、爽やかな雰囲気が感じられます。

筆者不明（紀元前二七四頃・秦）

左真ん中の古典**「石鼓文」**は篆書古典の中では基本的なものの一つであり、篆書の学書は大体この古典から始まります。肉厚な線と柔らかい運筆によってあたたかみが感じられます。

良寛（一七五八～一八三一・江戸（日本））

曹洞宗の僧侶であり、晩年の円熟した書法は日本のみならず中国でも高く評価されています。か細いけれど芯のある線で空間に働きかけるような、懐の広い書風が特徴的です。左下の**「自画像」**は彼が筆で書いた自画像の側に記された仮名の書です。



作品一覧

技術顧問

寺本蒼玄

創作・『掃雪開幽徑』……9

創作・『白駒過隙』……9

一回生

須田光太郎

創作・『琴棋書画』……11

橋本充史

臨書・『臨顔真卿劉中使帖』……12

森田歩

臨書・『臨欧陽詢九成宮醴泉銘』……10

渡辺紗英

臨書・『臨関戸本古今集』……14

二回生

石田あかり

臨書・『臨何紹基行書七言対聯』……11

岡雅博

創作・『百人一首　秋の二首』……15

高石京花

臨書・『臨粘葉本和漢朗詠集　氷　付春氷』……15

戸高海

創作・『王維詩』……13

中村詩子

創作・『冬に』……15

乗杉玲壽

創作・『テルーの唄』……16

凌楡凱

創作・『三和夏』……12

三回生

乾末樹

創作・『宋名臣言行』……11

近藤毅

創作・『遠』……13

関美乃

臨書・『臨西郷南洲務攬英雄之心』……12

豊留まり

臨書・『臨倪元璐行草五言律詩軸』……12

松岡柚花

臨書・『臨和歌体十種　伝藤原忠家』……14

四回生

内田鈴菜

臨書・『臨始平公造像記』……10

坂崎亜実

臨書・『臨乙瑛碑』……14

渡部裕貴

臨書・『臨始平公造像記』……10

五回生

石本森羅

創作・『重ねて李評事に別る』……10

修士一回生

吉田凌祐

創作・『李郭祐「發青泥店至長余縣西涯山口」より』……14

創作・『「子規句集」より明治二十七年「冬日」の句』……15

修士三回生

平野晶子

創作・『斉聖廣淵』……14

合作

戸高海・乗杉玲壽　二回生

創作・『交臨』……17

服部佳乃子・岩田恵理子・小笠原萌葉　四回生

創作・『青写真』……16

鵜川大輝・石本森羅　修士一回生・五回生

創作・『懐郷』……17

市川拓真・安田直記　修士一回生

創作・『珠星璧月』……16

覚道直治・中村勇真・二ノ﨑生・森ちひろ　修士二回生

創作・『画龍点睛』……16

作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄　先生

『掃雪開幽徑』

「掃雪開幽徑（ゆきをはらってゆうけいをひらく）（草應物）
小道の雪をはらって、友人の来るのを迎える」

豪快かつ滑らかに筆を走らせました。明末傅山の風にまとめました。



『白駒過隙』

「白駒過隙（はくくげきをすぐ）
光陰の速に過ぎ去ること」

力強く爽やかに表現したく、清末の趙之謙の風に仕上げました。



1

森田歩　一回生

『臨欧陽詢九成宮醴泉銘』　臨書　楷書　半切

「始以武功壹海内。（始め武功を以て海内を壱にし、）……」

最近全然書けていませんでした。おなじみの九成宮醴泉銘です。



2

内田鈴菜　四回生

『臨始平公造像記』　臨書　楷書　全紙

「始平公像一區。夫靈蹤弗啓、則攀宗靡尋。容」

大学生活最後の書展。最後はこれと前から決めていた作品にしました。



3

渡部裕貴　四回生

『臨始平公造像記』　臨書　楷書　全紙二分の一

「竭誠心為國造石窟糸答皇恩有資来」

桂キャンパスから失礼します



4

石本森羅　五回生

『重ねて李評事に別る』　創作　楷書　半切

「莫道秋江離別難　舟船明日是長安　呉姫緩舞留君醉　随意青楓白露寒」

孔子廟堂碑の筆法や字形を取り入れた楷書で唐詩選の詩を書きました。作品の迫力を求めるあまり品位のない作品とならないよう、文字本来の美しさを生かすことに注力したつもりですが、なかなか難しいですね。



5

乾未樹　三回生

『宋名臣言行』　創作　楷書　半切横

「成大事在膽
（大きな物事を成し遂げるのは、その人の何にも動じない胆力次第である）」
楷書一行、思い切って書いてみました。字数が少ないので余白のバランスが難しかったです。



6

須田光太郎　一回生

『琴棋書画』　創作　行書　半切

「琴棋書画」
早く耽楽の境地に至りたいものです。



7

石田あかり　二回生

『臨何紹基行書七言対聯』　臨書　行書　半切

「古帖時翻勤掃塵　春花未蒸自招蜂」
今年の夏に初めて鑑賞して、あまりの可愛さに感動したので、書いてみました。やっぱり可愛い。



8

橋本充史　一回生

『臨顔真卿劉中使帖』　臨書　行草　半切

「近聞劉中使至瀛州。吾希光已降。足慰海隅之心耳。又聞磁州為盧子期所圍。舎利將軍拾獲之。吁足慰也。」

原本に見る用筆法に注意を払いつつ、各文字の特性を考慮し、作品全体に遠近感を創出する表現を独自に目指しました。



9

豊留まり　三回生

『臨倪元璐行草五言律詩軸』　臨書　行草　二六

「満市花風起。平堤漲水流。不堪春解手。更為晩停舟。上埭天連雁。荒祠水蔽牛。杖藜聊復尒。転盼夕陽遊。」

明清くらいの作品に憧れがあったので挑戦してみました。思った以上に書いていて楽しかったです。



10

凌愉凱　二回生

『三和夏』　創作　行草　半切

「聚聚兮、淒嚶鳴幽林。簇簇兮、清水濆涓流。暑立之交日似然、御蔭望水沁足鮮。飯和兩載三逢夏、舊友新朋戲味乾。神戸岸、時如川。焉微處、道宏宣。錘鑾鏘秀哉、山河壯麗映和都。窈窕淑女具。喈別時壞人各異、榆林自有榮埭戸。」

下鴨・みたらし祭り所感をまとめた自作雑詩です。



11

関美乃　三回生

『臨西郷南洲務攬英雄之心』　臨書　草書　半切

「務攬英雄之心」

大らかで力強い筆跡に惹かれて選んだのですが、書いても書いても「ただの雑な字」っぽくなってしまい作品として仕上げるのが難しかったです。



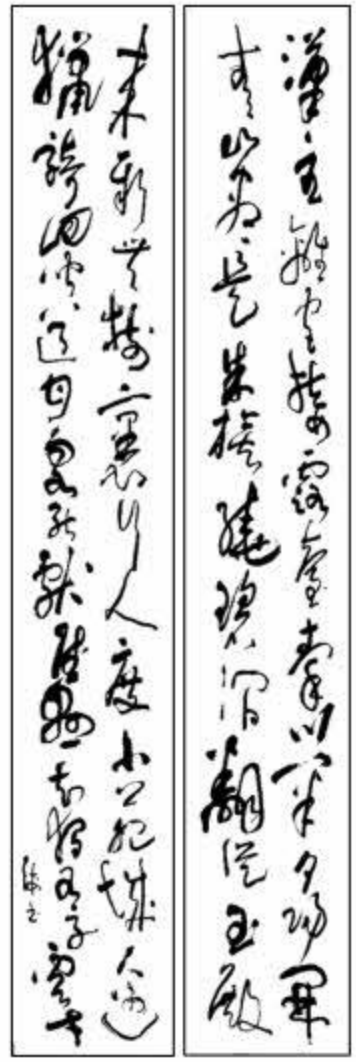
１２

戸高海　二回生

『王維詩』　創作　草書　一六二聯

「漢主離宮接露台，秦川一半夕陽開。青山儘是朱旗繞，碧澗翻從玉殿來。新豊樹里行人度，小苑城邊獵騎回。聞道甘泉能獻賦，縣知獨有子雲才。」

それぞれの字が魅力的になるように頑張りました！黄庭堅の学習の成果がでていると嬉しいです。



１３

近藤毅　三回生

『遠』　創作　草書　全紙

「遠」

狭い下宿の部屋に必死にスペースを作って大字書を数年ぶりに書きました。

共用室も使えるようになったので次回作はのびのび書きたいですね。



１４

坂崎亜実　四回生

『臨乙瑛碑』　臨書　隷書　半切



「司徒臣雄司空臣戒稽首言。魯前相瑛……（略）」

二年前に書いて不完全燃焼で終わってしまった古典に再挑戦しました。二年前より書く時間が取れなかったのでさらに不完全燃焼になったかもしれません。

１５

吉田凌祐　修士一回生

『李蒋佑「發青泥店至長余縣西涯山口」より』　創作　隷書　半切



「千峰鳥路含梅雨。五月蟬聲送麦秋。」

最近は日曜日に一人で筆を握ることも多くなりました。中々余裕を持った生活を送ることができず大変ですが、忙しさが日々の充実度を示すと思えば、暇を持て余すよりは良いのかもしれません。平日の研究生活とは異なるものは良い気分転換になります。

１６

平野晶子　修士三回生

『斉聖廣淵』　創作　篆刻　聯落



「撫民以寛除其邪虐功加于時徳垂後裔」

書道部所属七年目、ついに卒業制作です。

春から社会人、書道も篆刻も続けられるくらいの心の余裕を保つことが当面の目標です。

学生生活を充実したものにしてくれた書道部に大きな感謝を。ありがとうございました。

１７

渡辺紗英　一回生

『臨関戸本古今集』　臨書　仮名　半切



「秋の夜は露こそことにわびしけれくさむらごとに虫のわぶれば」

ゆったりとした雰囲気にひかれて選びましたが、書いてみるとなかなか難しかったです。

１８

松岡柚花　三回生

『臨和歌体十種　伝藤原忠家』　臨書　仮名　巻子

「和歌体十種　古歌体をかさはらへゐのみまきにあるゝまも…」

やわらかくて綺麗な線を目指しました。字の中の白が美しく見えると嬉しいです。



１９

吉田凌祐　修士一回生

『『子規句集』より明治二十七年「冬日」の句』　創作　仮名　色紙

「冬の日の刈田のはてに暮れんとす（冬の日能刈田の者氏尓暮連无と春）」

相も変わらず、かな作品を出品しています。小作品は制作も展示も比較的簡単なので時間がなくても手を出しやすくて、楽しく制作することができました。冬楪展が終わったら研究室の自分の机に飾ります。



２０

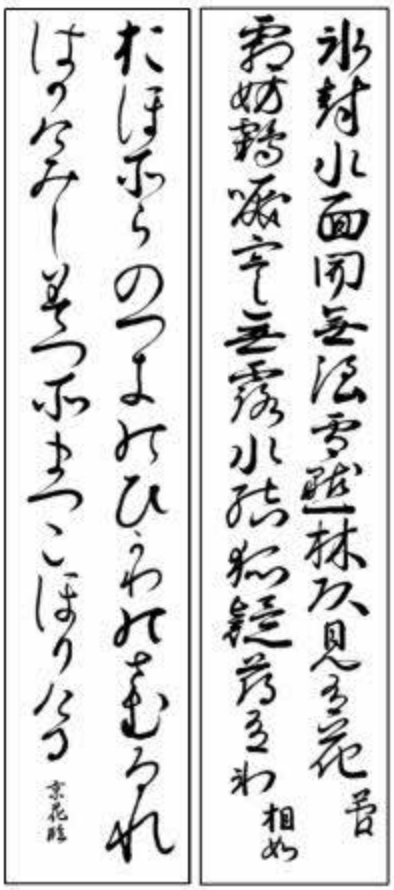
高石京花　二回生

『臨粘葉本和漢朗詠集　氷　付春氷』　臨書　仮名　一尺四、五尺二瓣

「氷封水面閉無浪、雪点林頭見有花。菅　霜妨鶴唳寒無響、水結狐疑薄有氷。相如

おほぞらのつきのひかりのさむけれ　ばかげみしみづぞまづこほりける」

初めて大字仮名に挑戦しました。漢字と仮名を調和させるのが難しかったですが、丸みと流れのある作品になるよう意識しました。



21

岡雅博　二回生

『百人一首　秋の二首』　創作　仮名　二六横

「あらし不(ふ)く
三(み)むろ農(の)山能(の)
もみ遅(おそ)盤(ば)八(は)
多(た)徒(つ)堂(た)の川乃(の)
尓(に)志(し)き奈(な)利(り)介(け)里(り)
於(お)く夜(や)満(ま)耳(に)
紅葉不(ふ)三(み)王(わ)遣(け)
那(な)くし可(か)能(の)
こる支(き)久(く)と支(き)處(そ)
阿(あ)き盤(は)可(か)奈(な)し起(き)」

かなの横作品は初挑戦で思い出に残る作品になったと思います。書いた和歌にも思い入れのある作品です。初めて書いた大字かな作品も「おくやまに～」の句でした。その割には締め切りギリギリに駆け込みで書きました。作品名ちょっと韻を踏んでるの伝わるでしょうか？



22

中村詩子　二回生

『冬に』　創作　調和体　半切横

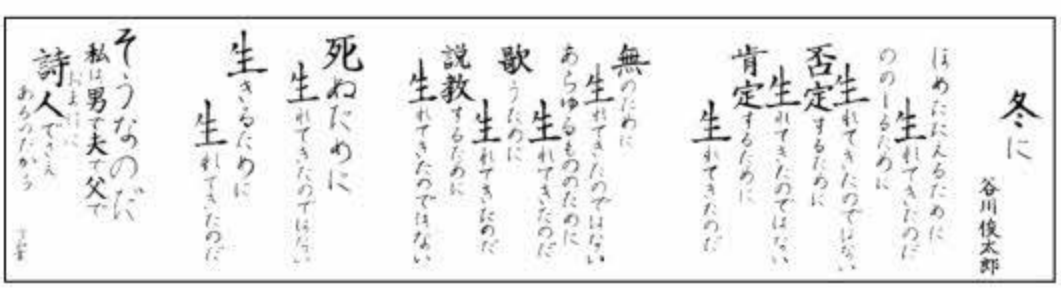
「冬に　谷川俊太郎

ほめたたえるために生れてきたのだ
ののしるために生れてきたのではない
否定するために生れてきたのではない
肯定するために生れてきたのだ

無のために生れてきたのではない
あらゆるもののために生れてきたのだ
歌うために生れてたのだ
説教するために生れてきたのではない

死ぬために生れてきたのではない
生きるために生れてきたのだ
そうなのだ
私は男で夫で父でおまけに詩人でさえあるのだから」

心にゆとりをもった、毎日を送りたいと思います。



２３

乗杉玲壽　二回生

『テルーの唄』　創作　調和体　半切

「色も霞んだ雨の中　薄桃色の花びらを　愛でてくれる手もなくて」

大好きなジブリ映画の歌の中でも、特に気に入っている「テルーの唄」から一番好きな歌詞を抜粋して書きました。季節が秋から冬へと移り、北風が紅葉や枯葉を吹き払う、そこに漂う哀愁を表現しました。



２４

服部佳乃子・岩田恵理子・小笠原明葉　四回生

『青写真』　創作　調和体　色紙

「青写真　新しい朝が世界に降り始めている」

四年間で思い出がたくさん出来ました。

ありがとうございました。



２５

市川拓真・安田直記　修士一回生

『珠星璧月』　創作　行書　半切

「珠星璧月」

一つの作品を二人でテイクアウトします。



２６

覚道直治・中村勇真・一二暉生・森ちひろ　修士二回生

『画龍点睛』　創作　行書　全紙二枚分

「畫龍點睛」

「物事を完成させるための最後の仕上げ」。

さらば、全てのショドウブイン。



27

戸高海・乗杉玲壽　二回生

『交臨』　創作　草書　半切二聯

「已見寒梅発　復聞啼鳥聲　愁心視春草　畏向玉階生」

二人で同じ詩文を用いてそれぞれ自分の書風で創作作品を制作し、それを交換して臨書して二聯にまとめたものを「交臨（交わりて臨す）」と題して作品としました。

（二人の書風が交錯することで、より良い作品になっているはずだ！）

戸高海：まるで傅山を臨書しているようだった！自分一人では書けない作品が書けてしまって感動しました。

乗杉玲壽：彼の礎である黄庭堅を臨書しまくってから臨みました。私らしさを入れ込む隙間はあったのでしょうか、謎です。とても楽しい合作でした。



28

鵜川大輝・石本森羅　修士一回生・五回生

『懐郷』　創作　行書　全紙

「遥か手稲山まで冴える空　開いた掌にふと纏う白い風／青い山稜静かに街にて散策する朝のこと　遠く船の音」

札幌と神戸出身の二人による自詠合作。二つの詩文にはある秘密が……？



【顧問・部員紹介】

顧問:京都大学大学院文学研究科准教授 成田健太郎

京都大学附属図書館 図書館企画掛主任 行友三輪子

技術顧問:日展会友 書家 寺本蒼玄

一回生

薬 淺雛穂乃花
経済 浅山桃佳
医 稲田梨乃
農 大林明日香
教育 岡野桂奈
経済 梶田晟充
医 木下美優
医 小谷大翼
文 坂田侑美奈
工繊 佐藤李郁
文 城本昌明
文 須田光太郎
農 鶴岡直穂
工 仲島大凱
法 中西結希乃
文 橋本充史
法 浜辺歩
医 張木すみれ
文 南出祐希
医 森田歩
工 山口尚樹
工 山下理子
総人 楊昭容
薬 由里本陽香
教育 吉田祥世
経済 米本舞桜
理 渡辺紗英
文 木村隼翔
総人 二宮海椰

二回生

薬 荒川実来
法 石田あかり
理 遠藤智倫
京女 大西沙穂
兵医 岡雅博
工 笠島光司
理 倉橋あい
総人 酒井珠生
医 城尾みのり
文 髙石京花
工 樽見勇我
農 戸高海
経済 中村詩子
理 乗杉玲壽
工 堀田千有希
同志社 三浦いずみ
理 凌榆凱
文 渡邉一輝

三回生

医 石田七彩
農 乾未樹
文 大橋明日香
医 片岡美緒
医 釜田弘一朗
法 栗原瑞樹
医 近藤毅
京女 鈴木翔子
法 関美乃
文 豊留まり
経済 益満朋佳
農 松岡柚花
教育 藍予智

四回生

理 秋友祥香
農 穴田小恵
総人 伊藤迅亮
農 岩田恵理子
総人 内田鈴菜
農 小笠原萌葉
医 岸根葵葉
工 北田綾
工 坂崎亜実
農 柴田達哉
工 豊永嵩晴
法 中村紀保子
工 野口直哉
農 服部佳乃子
総人 宮本真之介
工 渡部裕貴

五回生

文 石本森羅
同志社 中岡大吉

修士一回生

エネ科 阿部聡太
工 市川拓真
工 鵜川大輝
文 牛田聡実
経営 鍾寿
情報 中林亮
工 松尾有輝也
工 安田直記
理 吉田凌祐

修士二回生

工 覚道直治
工 金祺民
教育 邢書禹
経済 沙錦平
理 中村勇真
情報 一二輝生
神戸 森ちひろ

修士三回生

公共 平野晶子

博士一回生

理 原誠人

博士課程修了

地環 藤井基弘

書道用品と表装・額装 書遊

書遊 Online
Webでの購入ならお得にポイントをゲット！
お支払いはスマートにクレジットカードで決済可能。

LINE 公式アカウント
WEB で使えるお得なクーポン・毎月の SALE 情報を配信中
QR コードで今すぐ友だち追加しよう !!

書画WEB展覧会
WEB 展覧会への新たな挑戦。デジタルならではの利点を
活かして、書遊を世界へ発信しよう !!

京都・書道用具店
松楳園
一般用の書道道具からプロ専用の用具
まで幅広く取り扱いしております。小売も
しておりますので、お気軽にお越し下さい。
京都市下京区柳馬場通仏光寺下る万里小路町164
TEL 075-351-6380　FAX 075-361-8006
http://:www.shoubaien.co.jp　定休日(日・祝日)

取扱商品
書道用具全般
毛筆・松様園製
毛筆・中国製
墨・墨液 各種
紙・漢字・かな用
硯・下敷・印材
他・書道小物
水墨画用具

文房四寶（筆・墨・硯・紙）和紙工芸品　書画作品
書芸サロン 贊交
二条店　〒604-0931 京都市中京区二条通河原町西入北側
TEL・FAX／075－222－0390
E-mail：info@shoga-sankou.co.jp
株式会社 贊交社 本 社 〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町27
TEL／075－572－8964 FAX／075－572－8905

ご覧いただきありがとうございました。

京都大学書道部



This book was
made by the LeME